中原 泉 一枚の写真 31

研究改革2000 —『*Odontology*』

21世紀を目前にして，瞬時に地球の裏側まで情報を伝達し検索できる時代になった。医学研究にも，科学的根拠にもとづく研究（EBM），国際性のある客観的評価という黒船スタンダードが，津波のように押し寄せていた。私は，波打際まできているこの国際化に焦りをおぼえた。

それというのは1999年（平成11）当時，私は本学の研究状況を概嘆していたからだ。歯学会の例会は年４回行われたが，両学部とも参加者は，主催講座をふくめて10～15名であった。自講座の発表がおわると，一斉に暗くなった通路を腰をかがめて百足（むかで）のように退去した。年１回の大会も50名足らずにとどまり，口演の五分の一は他学会で発表済みであった。

例会・大会とも形骸化し，総合的学会を通じて学内研究者の視野を広める，という本来の目的を失っていた。そんな学内学会は，時間と費用の浪費にすぎない。私が危惧したのは，若い研究者たちが，それでいっぱしの研究活動をしているという，救いがたい錯覚に陥ることだった。

また，論文抄録を英文にした『Journal of N.D.U.』は，毎年，海外に送付している。ミシガン大学の親しい教授 John M. Powers に，「読んでる？」と問うたことがある。すると彼は黙って，親指と人差指に雑誌をつまんで，そのままポイと傍らのゴミ箱に捨てる仕草をしてみせた。抄録集などクズ扱いかと，私は痛撃をくらった。

さらに，邦文誌『歯学』は1999年の87巻１号をみると，原著14編中10編は，とても原著に値する論文ではなかった。せいぜい短報，臨床報告，あるいはボツになる内容だ。『歯学』のレベルは著しく低下し低迷し，対外的な評価は恥ずべきものであった。

かように，学内学会で発表し，慣れあいの大学院研究科で審査し，安直な『歯学』への投稿に甘んじて，低レベルの論文を量産している。言うならば，自前の道場で竹刀の練習試合に終始し，道場外での真剣による他流試合を逃避しているに等しい。

私は，沈滞した研究活動の抜本的な改革が急務であると痛感した。1999年７月，「日本歯科大学研究改革 2000」と題する改革案をまとめ，歯学会会長

の森田修己に提案した。困惑しつつも彼は，新潟歯学部長の一方的な立案に検討を約した。

改革案は，本学における研究活動の活性化を目的として，第三者評価をえられる発表と論文を創出するため，研究活動のスリム化と研究の高度化を図るとした。その骨子となる５つの改廃を掲げた。

１）歯学会例会は廃止する。研究発表は，国内外の専門学会等の学外学会において行う。
２）歯学会大会は廃止する。大会発表に代えて，テーマ研究等のシンポジウムを行う。
３）『Journal of N.D.U.』は廃刊する。
４）『歯学』を英文誌『*Odontology*』に改編する。論文発表は，国内外の専門学会等の査読制の学外誌において行う。
５）学部の特別研究生制度を暫時廃止し，大学院研究科に研究生の受入れ体制を整える。

歯学会という淀んだ池に，突然，５つの石が投げこまれた。大会や例会の学内発表は，大学院生や若い研究者の練習の場として必要である，と反論がでた ― 練習は講座の予演会でやればよいし，研究発表とは元々ぶっつけ本番なのだ。また，『J.N.D.U.』の廃刊は納得したが，『*Odontology*』を発刊しても，『歯学』は残すべきであると抵抗が強かった。

教授間には戸惑い，困惑，不安，不満が交錯し，会議は相当に揉めているという。私は，この改革案が受け入れられなければ，本学の研究は自滅すると腹をくくっていた。まともな教授であれば，本学の研究の現状と迫りくる国際化の波音を認識し，このままではいけないと内省すると信じた。

その結果，その年のうちに例会と大会は廃止，『J.N.D.U.』は廃刊となり，翌2000年（平成12）には『歯学』は88巻１号で終刊し，89巻１号から『*Odontology*』が発刊された。これらの改廃により，同年の歯学会決算は2,000万円も減額したと聞く。

前後するが，私が研究改革でもっとも苦しんだのは，『歯学』の閉刊であった。本学の研究活動が瓦解してしまうのではないか，とおびえた。３ヵ月間悩みに悩んだ末に，『*Odontology*』への転換を決断した。その頃，医学系雑誌は，① Medline/PubMed に収録されること，② Science Citation Index（S. C. I）に収録されて，Inpact factor（IF）を付与されることが，国際的評価の標準とされていた。2000年（平成12）６月，『*Odontology*』の初代編集長には，推されて歯学部教授の筒井健機が就いた。あと彼は，「英文誌なんてとても無理だ。IF なんて不可能だと思っていた」と語った。私のほうは知ったか振りしていて，案外，気楽にかまえていた。

筒井は，アメリカの科学雑誌社 Springer と出版契約をむすび，国内外64名にエディター（査読委員）を依頼し，国内外に原稿募集のパンフレットを配布した。出血サービスとして，論文の掲載料は無料，別刷50部は無料とした。

2001年（平成13）11月『歯学』を継承して，『*Odontology*』の初刊号（89巻１号）が発刊された。同号の原著は８編で，アメリカ１編，本学が７編という心もとない滑りだしであった。

2003年（平成15）６月，新潟歯学部教授の土持眞が編集長を引き継ぐ。同年９月に，Medline / PubMed に収録された。これは，IF を付与される重要なステップとなる。

それから，2009年（平成21）６月，『*Odontology*』に初めて IF が付与された。IF 1.833で，歯科・口腔外科関係の国際誌55誌中21番目の高さであった。日本の雑誌は日本歯科理工学会誌１誌だけで，歯科大学・歯学部の発行する雑誌としては最初である。実に，IF を獲得するまで７年半を要した。

IF が付くや否や，投稿数が一挙に８倍に跳ねあがった。あくまで国際評価法の一つであるとはいえ，私たちは IF の威力を思いしらされた。

発刊10年ほどして筒井健機が，「あのとき *Odontology* にしていなかったらと思うと，ゾッとします」と述懐した。私も，まったく同感だった。

2013年から掲載料を有料としたが，投稿数は2014年182編，2015年233編，2016年192編にのぼった。投稿国は，カナダ，ポーランド，スイス，ドイツ，アメリカ，レバノン，スウェーデン，スペイン，ブラジル，メキシコ，フィンランド，サウジアラビア，タイ，オランダ，チリ，トルコ，日本（国公私立の医学部・歯学部）である。

2017年（平成29）からは，当初年１回だった発行が年４回となった。今や『*Odontology*』は，日本から世界へ発信する国際誌として，ぶっちぎりのトップランナーとなっている。

土持 眞は，リタイアの2017年末まで20年間，この国際誌の編集長として，まことに地味なシンドイ作業に尽力した。

（写真：横にみる『*Odontology*』初刊号の原稿募集のパンフレット）